

九州大学医学部熱帯医学研究会

第43期 活動企画書

2008

Academic Society of Tropical Medicine

Kyushu University

目次

会長あいさつ

信友 浩一 九州大学大学院医療システム学教室 教授

総務あいさつ

宮原 敏 九州大学医学部医学科3年

【海外研修班】

リビア班

タイ班

中国班

【国内研修班】

ホスピス班

第43期予算

会長挨拶

2008年度の活動企画が新総務である宮原敏君のもとで纏まりましたのでご挨拶申し上げます。

毎年新たなフィールドを求め会長を驚かせる企画が出てくるのが常になって来ていますが、今年は「リビア班」がそれです。看護力が弱いが故に医療がどのような影響があるかサーベイして来るという斬新なテーマの班です。自らの眼とデータで検証する、との見識が育っていくと頼もしく思っています。

他の3班は当会の恒常的なテーマである「貧困・感染症・死」を対象とした深みのある活動班であります。「タイ班」では農村での医療システムを、「中国班」では売血に注目をしての感染ルートを、「ホスピス班」は生まれて来たから死ぬのだとの視点でホスピス医療を、観てきます。帰国後の深遠な討議を経て学生が成長していくのを見るのは会長としての醍醐味でもあります。

これら今年度の4活動企画を昨年度同様に皆様方からの厳しいご助言と暖かいご支援をお願いして挨拶に代えさせていただきます。ご高配のほどよろしくお願い申し上げます。

九州大学医学部熱帯医学研究会 会長
九州大学医療システム学 教授
信友 浩一

総務あいさつ

全く見知らぬ土地を訪れ、研修を行う。学識も経験もない我々学生にとって、個人では到底なしえないことなのかもしれません。熱帯医学研究会という団体が生み出す、人と人との『つながり』が、充実した活動へと導いてくれたのだと思います。

新たな取り組みとして、今年度より同窓会メーリングリストが本格的に始動しました。四十三年の歴史の中で、先輩方が築いてこられた縦の『つながり』を少しでも多く活用し、さらに充実した活動を行うための試みです。

また、九州・山口の医学部生との交流から、同世代の横の『つながり』によって、互いにより広い視野で問題意識を共有し合っています。

現在、部員の大半を3年生以下が占めています。部内に新しい思考が生まれるという利点の反面、それらの思考は浅く、流されやすく、先輩方から伝わる伝統を絶やしてしまう危険性を内包しています。先に述べた縦と横の『つながり』によって、足りないものを補い、これまでの伝統を守り抜いていこうと思います。

今年度は、海外班としてタイ班、中国班、リビア班、国内班としてホスピス班の計4班を立案させて頂きました。未熟ではありますが、身軽な学生という立場を活かして、自らの興味を果敢に突き詰めていけたらと思います。

フットワークがネットワークを生む。

我々の活動が、新たな『つながり』を生むことができれば幸いです。

最後になりましたが、本年度も変わらぬ暖かいご指導、ご支援のほどよろしく申し上げます。

九州大学医学部熱帯医学研究会 総務

九州大学医学部医学科3年

宮原 敏

リビア班

活動場所：リビア

活動期間：8月上旬～

班員：藤田 彩香（九州大学医学部看護学科2年）

活動目的：

リビアでは看護学の水準が低く、外科手術が成功しても、その後の看護が不十分なため術後の回復が遅れるなどの事例が発生している。そのため医療水準自体も低くなってしまっている。今回の活動では現地の女性の地位や教育環境などについて考えたい。

抱負：

リビアでは、医師の技術水準は高いものの看護師の教育水準が低いために問題が発生している。日本でも現在看護師の数が不足しており、それによって看護師の技術水準の低下が予想される。今回の活動では、リビアにおける看護の現状を知るとともに日本における問題についても考察したい。

タイ班

活動場所：タイとその周辺国（カンボジア、ラオスなど）

活動期間：2008年8月（3～4週間）

班員：江川 知康（九州大学医学部医学科2年）

班員募集中

活動目的：

タイとその周辺国のまだ医療環境が十分に整っていない貧しい地域に行き、途上国の農村部における医療の現状とその改善に向けた取り組みを学ぶ。

抱負：

途上国の貧しい地域ではいまだ適切な医療を受けられない地域が少なくない。医療環境が整っておらず、地域住民の医療や衛生環境に対する意識も低い。そのような地域の診療所や巡回診療の現場、また住民自身による健康調査や衛生教育ができるよう住民に対する教育や広報活動を行っている現場を訪れ、地域の実情に合わせた医療の構築に向けた取り組みについて学んでいきたい。

中国班

活動場所：中国（上海、河南省など）

班員：西村 直矢（九州大学医学部医学科3年） 班長

大村 洋文（九州大学医学部医学科2年）

現在、班員募集中です。

活動目的：

中国・河南省における売血による HIV 感染拡大の現状を現地で調査し、中国や、また日本における HIV 感染拡大について考える。

抱負：

現在 HIV の感染は世界中で拡大しています。主な感染経路としては、性交渉や麻薬常用者の注射器使いまわしなどが挙げられますが、中国の河南省や四川省では売血による HIV 感染が起きている。中国でなぜこのような感染拡大が起こったのか、またそれについてどのような対策が行われているのか、ということを実地で学びたいと思いこの活動班を企画いたしました。また、中国の例から日本における HIV 感染についても、互いを比較しながら改めて深く考えることができたらいいと思っております。

ホスピス班

活動場所：栄光病院など

活動期間：7月上旬～8月下旬

班員：花村 文康（医学科3年） 班長

活動目的：

実際に国内のホスピスを訪問し、そこで働く医療者、入院している患者さん、そのご家族からお話を伺い、終末期医療の現状と問題点を考察する。

抱負：

日本人の平均寿命は80歳を越え、世界でも1, 2位を争うほどの高齢者大国になった。若くして失われる命が少なくなったことは喜ぶべきことかもしれない。しかし、ひたすらに「死」を克服しようと邁進してきた近代医療の果てに我々を待ち受けていたものは本当に幸福だったであろうか。人は必ず死ぬ。これが避けようのない事実であるとすれば我々が考えるべきことは「如何に死を避けるか」ではなく「如何に死を迎えるか」ではなかろうか。常に死を感じ、また同時に生を感じる場でもあるホスピスとそれを取り巻く人々に接することで医療を志すものとして、1人の人間として自分や他人の死にどう向き合っていくべきかを学んでいきたい。